

はらっぱ

令和6年6月19日
山形市立南沼原小学校
学校だより 第3号
文責 校長：石澤 友章



心を一つに 大きな成果を

～6年生 陸上記録会への取り組みから～

今年も6年生が、陸上運動に取り組みました。学年陸上記録会を最終ゴールに据え、体育の時間を中心に全員が練習を重ねました。その中から市の陸上記録会の代表選手が選ばれ、先日の大会に出場することになりました。朝や放課後の練習は、天候不順もあり思うように時間が取れなかったようです。そのような中、自分たちの力を高めようと、仲間とコミュニケーションをとりながら課題を解決していく姿や、練習後に「最後にもう一本だけやって終わりにしよう」と自分たちで考えながら力を高めようとする姿に感心しました。本番で思い通りに力を発揮できた人も、悔しい思いをした人も、その練習の過程と本番で感じた緊張感はかけがえのない経験となったはずです。そんな中、女子の400mリレーチーム（下欄参照）が自己ベストを大幅に更新する走り、山形市で一位の成績を収めることができました。おめでとうございます！



～選手を後押ししたスタンドの応援～



当日は、選手以外の6年生全員がスタンドから応援しました。応援リーダーが先頭に立ち選手に大声援を送る姿は、地の利を生かした本校ならではの光景。競技開始直後、私は応援席の対岸にある本部席で他校の校長先生たちと見ていましたが、本校の一致団結した大きな声援は本部席にもしっかりと届き「南沼原の大応援団すごいね」と周りの校長先生方から感心された次第です。その後、私もスタンドの応援席に行き6年生の姿を見たときにさらに感心しました。あちこちで選手たちに心を届けようと子どもたちが声をかけていますが「いいぞ」「がんばれ」「ドンマイ、ドンマイ」「おいしい」「もうちょっと」「次はいけるよ」等、失敗しても成功しても、聞こえてくるのはいたわりや労いなど温かい言葉ばかりです。応援団の前を通過するときの選手の走りぶりから、明らかに仲間の声と思いが届いていたことがわかります。選手たちの活躍を支え、気持ちを後押ししたことは間違いありません。この陸上記録会を一部の人のものにせず、全員で心を一つにして取り組んだ6年生を誇りに思います。



入賞おめでとう！

女子4×100mリレー 第1位 記録 58秒53

稲毛桜来さん、阿部莉衣乃さん、佐藤純希さん、太田果穂さん

女子 800m走 第3位 稲毛 桜来さん 記録 2分47秒96

男子1000m走 第4位 西田 葵さん 記録 3分16秒06

第5位 折原 蒼典さん 記録 3分16秒71

その人の立場になって考えること

～4年福祉学習 体験を通して学ぶ～

4年生が毎年、市社会福祉協議会の方を招いて「福祉」について学んでいます。先日は、車いすを使った体験学習を行いました。これは学校運営基本方針に掲げる「**多様性の実感**」、「**よい良いかわり方を学ぶ**」につながるものです。車いすに乗る側を経験し「どんな言葉をかけてもらえたら嬉しいか」を感じた子が、次に車いすの押し手を経験すると「今から上り坂ですよ」「次は左に曲がりますからね」など、自然な言葉がけが増えていました。まさに、体験を通して学び、それを実践しようとする子どもたちの姿がありました。社会福祉協議会の方々からも「すぐに私たちのお手伝いが出来そうな人がたくさんいますね」と嬉しい言葉をいただきました。



ICT 教育とメディアコントロール

学校では、タブレットや電子黒板の導入も計画的に進められ、教育のデジタル化・DX化は着実に進んでいるのと同時に、ゲームや動画サイトなどのメディアコントロールが重要視されています。情報機器やインターネットのメリット・デメリットと考えられるのは、以下の通りです。

【メリット】

- ①個別最適化された学びを推進することができる。
- ②豊富なメディアコンテンツを活用することができる。
- ③動画配信やビデオ会議システムを使った交流学习等に活用ができる。

【デメリット】

- ①インターネットや各種メディアに関係するトラブルや犯罪に巻き込まれるリスクがある。
- ②ゲーム及びネット依存症などの健康被害につながるおそれがある。

学校では、上記デメリットを最小限に、そしてメリットを最大限にして ICT を活用できるよう取り組んでいます。しかし、デメリットを最小限にすることに関しては、学校単独でできることは限られています。なぜなら、子どもたちが家庭で使用するスマートフォンやインターネットに接続できるゲーム機等について見守ることができるのは、保護者のみなさんしかいないからです。

様々なメディアの中でも、子どもたちにとって一番身近なゲームに関しては、2018年に世界保健機関（WHO）が「ゲーム障害」を新たな国際疾病分類と認定しました。それ以降、様々な書籍でも取り上げられています。精神科医であり、パーソナリティ障害の臨床に取り組む第一人者の岡田尊司氏は、自身の著書の中で以下のように警告をしています。

文春新書「インターネット・ゲーム依存症 ネットゲからスマホまで」岡田尊司 著 より

- ・インターネットやゲーム依存者の脳内で、覚醒剤など麻薬依存者と同様の神経ネットワークの乱れが見られた。
- ・タバコやアルコールは子どもには販売されないが、ゲームに関しては子どもがプレーすることに制限がない。
- ・ゲームだけでなく、動画やメールに夢中になり、暇さえあればスマホの画面を見続けることで、いつもスマホが手元になると不安だという人や、絶えず癖のようにさわっていないと落ち着かない人が増えている。これが続くと依存症となる。

【依存症による後遺症】

- | | |
|--------------------|---------------|
| ◆睡眠リズムの崩壊と慢性的な睡眠障害 | ◆学業成績、職業機能の低下 |
| ◆遂行機能や注意力、記憶力の低下 | ◆うつ状態や無気力、無関心 |

本校では、今年も7月にメディア学習を計画しています。子どもたちが、学校でも家庭でも適切に各種メディアが活用できるよう、皆様と連携・協力して取り組んでいきたいと思っています。